

栃木の棚田で田植え

去年ユキナガに紹介してもらった栃木の棚田。去年のうちに何度かお邪魔させてもらって、**田んぼと雑木林が繋がる美しい情景**とタガメやゲンゴロウが住み着く**超貴重な自然環境**にすっかり惚れ込んでしまい、ぼくもオーナー制度に申し込むことにした。ということで、今年度から**田んぼのオーナー**になり家族で栃木に通うことになった。

ここで言う「オーナー」はちょっとイメージとは違うかもしれない。「所有者」という意味ではないので、オーナーに田んぼの所有権は無いし、米を作って金儲けができる訳ではない。この「棚田のオーナー制度」は、地域外の人（オーナー）が年間登録費を支払い、現地の農家から指導を受けながら**農業体験をさせてもらうプログラム**だ。支払ったお金は田んぼの維持や保全に役立ててもらおう。この場所では、棚田に広がる田んぼを50人を超えるオーナーみんなで管理し、収穫したお米はみなで分配する。この棚田に限らず、今日本では、地元の農業関係者の**高齢化**が大きな問題となっていて、このオーナー制度は**棚田の保全**や**地域の活性化**を目的としている。この場所でオーナーに登録しているのは、現地に近いところに住んでいる方々に加え、ユキナガの家族やぼくらのように県外から通っている人もいる。子供連れの若い家族もいれば、20年オーナーをやっている大ベテランもいる。**宇都宮大学の研究室も学生を連れて参加していた。**

オーナーは月に1回棚田に通って作業をやるが、行けない期間は現地の**棚田保全協議会**の方々が手入れをしてくださっている。現地の高齢の方々が世話してくださっている以上、根本的な「**里山の高齢化**」の問題は解決しているわけではないが、若い世代や他地域の人に**興味を持ってもらう制度**としては非常に重要だと思う。現地の方々と**交流**できるのも大きな魅力だ。

ぼくは生まれた時から都会っ子なので、幼少期に図鑑で見た「**里山**」とか「**雑木林**」に強い憧れがあった。里山を身近に感じたいという思いと、息子に田植え体験をさせたいということもあって登録することにした。あと、前にも書いたが、生物の教科書に「**里山の減少**」の話題が登場するのに、身近じゃなさ過ぎて何も語れなかったもどかしさも参加を決めたきっかけの一つだ。

ぼく自身、田植えなんて全くやったことがないし（ボルネオでマングローブを植えるという特殊体験はしたことがあるが）、地元の方々の思いや行政のかかわり方などまだ深いところは全然分かっていなくて、その辺ちゃんと知っていきたいと思っている。いずれにしても、**今までやったことがないこと**に関われるのは刺激的で楽しい。

参考：・農林水産省HP「棚田オーナー制度」 ・棚田学会編(2014), 棚田学入門, 勁草書房



4月下旬「クロ掛け」 クロとは畦のこと。泥を塗り固めて田んぼを囲う畦を作り、田植えのための準備をする。



5月中旬「田植え」 苗代田という別の場所で育てた苗の束を田んぼに植え替える作業を田植えと呼ぶ。息子は全身泥だらけで楽しそうだった。



田植え直後の様子 ロープを張って、それに沿ってまっすぐに植える「正条植え」。明治30年代より前の田植えでは乱雑に植えられていたらしい。



6月中旬、田植えから1か月後の様子 稲の苗がしっかり育っていた！自分たちで植えることで成長がより一層うれしい。



6月中旬「草刈り」 稲以外の草もどんどん成長するので、余分な草を刈っていく。



田んぼの中も草刈り 水田中耕除草機という器具を使う。正条植えて等間隔に植えることで苗の間の除草が格段に楽になったそうだ。



ホタル 6月中旬 夜になるとゲンジボタルとヘイケボタルが飛び交っていた。ホタルも全国で減少している。



ホタルカゴ（蛭籠）の作り方を教わる 昔は麦の茎を編んでこのような虫かごを作ったそうだ。六条麦という品種の麦の茎を霧吹きで濡らして柔らかくし、編んでいく。茎は中空なので継ぎ足せる。

